

清水 有香(毎日新聞学芸部記者)

國府さんの機械作品には人間くささがあった。喜びや悲しみ、そして怒り。いや、戸惑いといったほうがいだろうか。それらが交ぜになったような複雑な感情。とにかく私は國府作品を初めて見たその日に、心を持つ不思議な機械たちに魅せられたのである。

2013年6月25日、西宮市大谷記念美術館の個展取材したのが國府作品との出会だった。國府さんは半袖シャツ姿で、忙しそうに作品のメンテナンスをしていた。当時の取材ノートをめくると、飾らない真っすぐな人柄がすぐさま思い浮かんだ。「もの作りの欲求には幼いころからの車好きということがあります。」そう語っていた。

《Parabolic Garden ROBO》(2013年)には「進むべき方向が分からなくなった自分を重ね合わせた」と教えてくれた。自動車の部品でできた脚と胴体の上に、パラボラアンテナを載せた立体。アンテナ部分には土が敷き詰められ、緑が芽吹いていた。「いい知らせを待っているけど何も聞こえない。それは自分の感度が悪いからなのか。意味がないと思っていたアンテナに小さな緑の庭ができていた。気付かなかったけど、誰かが教えてくれた。」前向きに受止めようとする作家の心が表現されていた。

一方で、「科学技術によって問題を解決することが正しいとも思わないし、それを批判することは簡単。僕は文明を享受しながら生きる人間として、葛藤やアイロニーを作品にしたい」とも話していた。東日本大震災に伴う原発事故をきっかけに制作された《水中エンジン》(2012/13年)や《未来のいえ》(2013年)には、その思いがストレートに表れていた。閉ざされた空間で放熱や水の循環を提示する両作品には、「3・11以降の社会をどう生きるか」という問いが横たわっていた。

バイクや車が大好きだった少年はそのまま大人になり、テクノロジーの可能性への期待と同時に、その危険性に対する批判的なまなざしを両輪に制作を続けた。科学と自然、そして人間のあるべき関係を問いながら、國府さんはそこから目をそらさずに模索を重ねた。自分に対して、芸術に対して、常に正直であり続けた人なのだと思う。